

藤本伊三郎先生を偲ぶ 藤本先生に導かれた半生

祖父江 友孝

国立がんセンター がん対策情報センター
がん情報・統計部

私が藤本先生とはじめてお話したのは、昭和 58 年大学を卒業し、国家試験が終わって、発表があるまでの 4 月下旬ごろだったと思います。鈴木隆一郎先生に連れられて、芦屋のご自宅にかなり遅い時間に伺いました。藤本先生は、応接間で何か解析結果を眺めながら、ウィスキーを飲んでおられました。大気汚染と肺がんとの関連の地域別のリスク比のようなものだったと思います。この光景を見て「まんざら悪くもなかな」と少し思ってしまったために、その後の私の進路は大きく変わってしまいました。

何故、突然、藤本先生の自宅に何うことになったかという、阪大医学部 5 年次の公衆衛生学生実習を鈴木先生のところでお世話になり、それはとっくに終了していたのですが、資料が残っているから整理に来るようにと 4 月下旬に鈴木先生から連絡があり、仕方なく出向いたところ、資料の整理はそっちのけで延々 3 日間勧誘の話が続きました。挙げ句の果ての藤本先生ご自宅訪問でした。その後、予定していた第 4 内科の医局説明会には行けず、公衆衛生学の朝倉教授に挨拶に行行って「めずらしいですなあ」などと言われて推薦文を書いて頂き、そのまま大阪府立成人病センター就職ということになりました。最初の 1、2 年は、折角医者になったのだからということで、医者のおまねごとをさせて頂き、4 年目には、米国ジョンズホプキンス大公衆衛生修士コースへ留学させて頂きました。

帰国後、藤本先生から言われたのは「おまえの仕事は論文を書くこと」でした。当時、私の関与していたことは、調査部の他の先生とはやや違っていたので、論文のネタは自分で考えるしかなく、また、藤本先生からテーマ自体を指示されたことはほとんどありません。しかし、書いたものを持って行くと徹底的に直して頂きました。特に日本語の文章は、ほとんど原型が残らないほど直されました。藤本先生の文章は決し

てうまい文章ではないのですが、誤解の生じる危険性が極めて少ない文章です（やたら点が多い）。この時期に、こうした文書の書き方の基礎を教わったのは、今思うと非常に恵まれた環境でした。その後、自分の周りにあるデータを工夫して英語の論文を書きましたが、大阪で書いた私の論文はすべて藤本先生との共著です。いくつかの論文には、共著者として藤本先生の名前は出ていませんが、すべて藤本先生に見てもらっています。成毛班の肺がん検診の論文のときは、藤本先生の手間を相当取らせたためか、藤本先生自ら「acknowledgement くらいには入れてくれや」と言われて、そのようにさせてもらいました。

その後、平成 6 年に私は国立がんセンターに移りましたが、この時の直接のきっかけは、国立がんセンターに情報センターを立ち上げる構想があり、大阪から地域がん登録を担当する人を出してくれ、と当時の末舛総長から藤本先生あてに依頼があったためです。結局、この時点では情報センター構想は実現しませんでした。私が移る話だけは残りましたが、東京に来てからは、がん登録とはあまり関係ない立場で過ごしていましたが、平成 14 年に研究所の部長になった際に、がん統計を担当する部が必要と考え、広橋先生のご支援のもと、第 3 次対がん 10 年総合戦略事業「がん罹患・死亡動向の実態把握に関する研究」班を担当し、がん登録に関与するようになりました。平成 18 年には、がん対策情報センターが設置され、地域がん登録室・院内がん登録室が設けられました。味木先生、西本先生をはじめとするスタッフの奮闘のおかげで、国立がんセンターがわが国のがん登録においても一定の役割を果たせるようになったかと思います。相変わらず、毎日バタバタで過ごしていますが、少しでも藤本先生に教わったことを、スタッフ面々に伝えていくことができればと思っています。